

農 林 水 産 技 術 会 議
技 術 指 導 資 料
平 成 2 6 年 3 月

イチゴ栽培中のベッドを利用した 夏どりメロンの間作技術



千 葉 県

千葉県農林水産技術会議

● 表紙写真

左：イチゴ栽培中のベッドでメロンを間作している現地圃場（館山市）

右：収穫適期の「レノン」果実

1. はじめに

イチゴの促成栽培では、5月に収穫が終わった後、9月の定植まで圃場が空いた状態となります。この期間に、イチゴ栽培中のベッドを利用したメロンの間作を行うことで、商品性の高いメロンを生産することができます。3月下旬から4月中旬にイチゴの一部を間引いてメロンを定植し、6月下旬から7月中旬に収穫する作型が可能です（図1）。ここでは、メロン栽培のポイントについて紹介します。

月旬	2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月																			
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下																	
メロン栽培				○	○	●	●																																		
イチゴ栽培	□	□	□			△																		●																	
主な作業	メロン栽培			播種			定植・置肥			誘引・整枝			病害虫防除			交配（ミツバチ）			玉選び・玉吊り			病害虫防除			収穫			片づけ・耕うん			土壌消毒			土壌消毒終了							
	イチゴ栽培			収穫			病害虫防除			親株植付け									収穫終了			片づけ			育苗開始						育苗終了			畦増殖終了			畦立て			定植	

図1 イチゴ栽培ベッドを利用したメロンの間作体系

注) ○：播種、●：定植、□：収穫、△：イチゴ親株植付け、■：イチゴ育苗

2. 栽培のポイント

(1) 品種

「TL タカミ」((公財) 園芸植物育種研究所)、「肥後グリーン」(松井農園 (株))、「レノン」(タキイ種苗 (株)) など、つる割病とうどんこ病に抵抗性を持ち、耐暑性が強く、大果で高糖度の品種が適しています (写真1)。

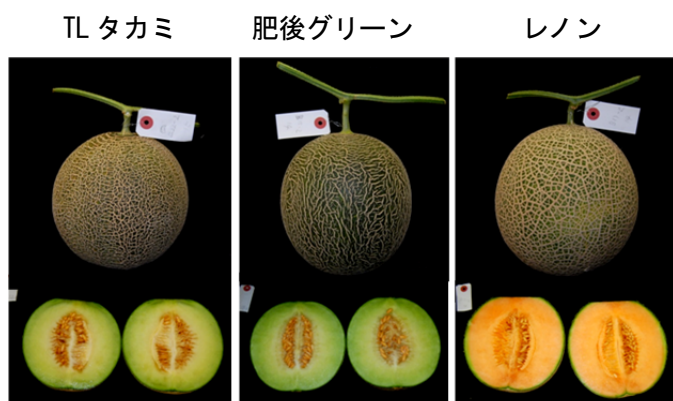


写真1 イチゴ後地に適する品種の果実外観と果肉色

(2) 播種・育苗

3月上旬～中旬に、30cm 四方の5×5連結ポットに育苗培土(げんきくん果菜200など)を入れ、メロンを1粒ずつ1cmの深さに播種します。播種後はたっぷりかん水し、温室内で暖房または電熱温床を利用して、発芽まで地温を25～30℃に保ちます。発芽後は光をたっぷり当て、日中の気温は28～32℃、夜間は18～20℃で育苗します。本葉1枚展開後、曇天日にかん水を控えて培土表面を軽く乾かすことで、根張りを良好にできます。播種後20～25日で本葉2枚の定植苗が得られます(写真2)。



写真2 定植適期の苗(播種後23日目)

(3) 定植

土耕ベッドに2条植えて栽培中のイチゴのうち、片側1条の株を60～100cm間隔(3～5株に1株の割合)で間引きます。間引いた場所に植え穴を作り、メロンの苗を定植します(写真3)。栽植株数は10a当たり700～1,300株(収穫果数1,400～2,600個)とします。定植後はたっぷりかん水し、基肥として粒状化成肥料(くみあいエコ化成888など)を株当たり窒素分量で0.1gずつ株元に施肥します。



写真3 イチゴを間引いた場所に定植した苗

(4) 定植後の管理

イチゴ用のかん水チューブを利用して定期的にかん水します。子葉は病害が発生しやすいので、活着後直ちに清潔なカミソリで切り落とします。イチゴ栽培を優先した温度管理とし、日中の気温は22～25℃、最低気温は7～8℃とします。

(5) 誘引・整枝

メロンの親づるは、支柱または誘引ひもを利用して上方に誘引します。支柱より誘引ひもの方が低コストです。仕立て方は、親づる 1 本仕立ての 2 果収穫が適します。子づるは 11 節目まで摘除し、12～15 節目の子づるのうち、雌花（両性花）が着生している子づるを 3～4 本選んで残します（図 2）。親づるは、着果節位から上位 10～12 枚の葉を残し、25 節前後で摘心します。

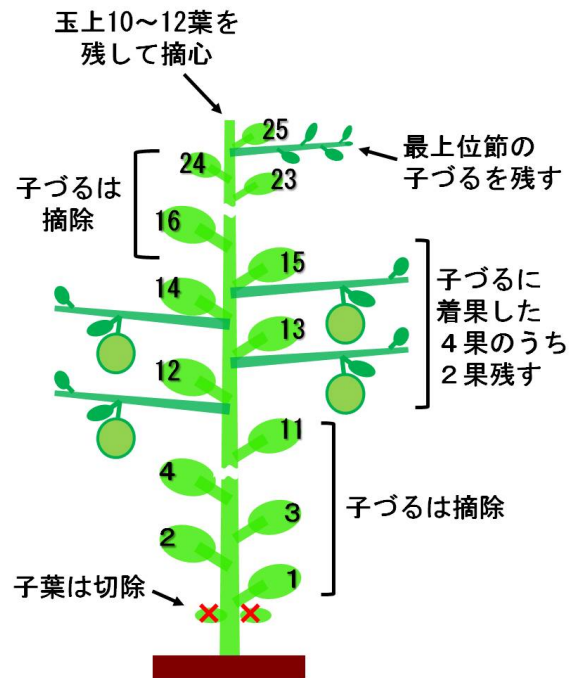


図 2 メロンの整枝方法

(6) 交配

イチゴ交配用のミツバチを流用して、5月上旬～中旬にメロンを交配します。天気の良い日はミツバチが飛びませんので、午前中に手で交配を行います。交配日をラベルに書き、果実ごとに交配後日数が分かるように管理します。

注) 葉上の数字は親づるの節位を示す

(7) 交配後の管理

図 2 に示したとおり、着果した 4 果のうち、やや縦長で肥大が良い果実を 2 果選んで残し、子づるは 2 節目で摘心します。果実が鶏卵玉の大きさになったら、誘引ひもで玉吊りを行います。最上位節の子づるを 1 本だけ残して放任し、長くなったら 1 芽残しながら切り戻すことで、収穫期まで草勢を強く保つことができます。株間のイチゴは収穫が終わり次第、ベッドを崩さないよう地上部を刈り取って処分します。

栽培後半のメロンは、土耕ベッド内の残肥を吸収するため、基本的に追肥は必要ありません。葉色が薄い場合には、水溶性肥料 (OK-F-1 など) の液肥を、1 回につき株当たり窒素成分量で 1 g



写真 4 交配後 35 日頃のメロン

分をかん注します。写真4のとおり、ネット形成が終了する交配後 35 日頃まではかん水量をやや多めとし、その後は徐々に減らして果実の糖度を高めます。ハウス内の気温は、35℃を超えないように管理します。

(8) 病害虫防除

本作型における病害虫の発生は軽微ですが、アブラムシ、ハダニ、うどんこ病が発生し、メロンへ被害を及ぼす場合があります。特にハダニの被害(写真5)は、イチゴからメロンへ拡がる場合があるため、メロンの定植前に集中して防除することが重要です。イチゴの栽培で硫黄くん蒸器を使用している場合は、メロンの栽培にも引き続き使用することで、ハダニやうどんこ病の発生を抑制することができます。薬剤散布による防除の場合、イチゴとメロンを同時に栽培している間は、両作物に登録・適用のある農薬のみが使用でき、収穫前日数に留意する必要があります。



写真5 ハダニの吸汁害により黄化した葉

(9) 収穫

交配後 53~58 日で収穫となります。結果枝先端の葉の黄化(写真6)と、果梗部の離層形成も収穫適期の目安となります。

館山市のイチゴ圃場で栽培した「TLタカミ」、「肥後グリーン」、「レノン」の果実特性を表1に示します。糖度は14~18度と高く、果重は2kg前後の大果で、商品性の高い果実が収穫できます。



写真6 収穫適期の「TLタカミ」果実
注) 矢印は結果枝先端の葉の黄化

表1 館山市のイチゴ土耕ベッドで間作したメロンの果実特性

品種名	販売元	果肉色	果重 (kg)	糖度 (Brix)	収穫の目安 (交配後日数)
TLタカミ	(公財)園芸植物育種研究所	淡緑	1.5~2.5	14~17	53~55日
肥後グリーン	松井農園(株)	淡緑	1.7~2.5	15~18	55~58日
レノン	タキイ種苗(株)	橙赤	1.8~2.5	14~16	55~58日

(10) 収穫後の管理

収穫終了後は速やかにメロンの株を片づけ、秋のイチゴ栽培に向けて土壌消毒を行います。期間は太陽熱消毒で1か月間、土壌消毒剤（クロルピクリンなど）による消毒で2週間が必要です。

(11) 経営上の留意点

3月下旬～4月中旬にメロンを定植する際、イチゴの株を一部間引くことでイチゴ生産の収益がわずかに減少しますが、メロン生産による増収分が大きく上回ります。メロンの玉選び・玉吊りと収穫は短期間に作業が集中する上、これらの時期はイチゴの育苗が重なることから、状況に応じて雇用労力を活用することが必要です。

3. 終わりに

イチゴ栽培中のベッドを利用したメロンの間作では、市場出荷や直売向けの生産に加え、観光メロン狩りも可能です(写真7)。早春のイチゴ狩りに加えて、夏季の観光・直売用にメロンを生産することで、新たな観光需要の創出に寄与することができます。

本作型のメリットとして、(1)大果・高糖度で商品性の高いメロンが得られる、(2)イチゴ栽培用の資材（マルチ、かん水チューブ、ミツバチ、硫黄くん蒸器など）を流用できる、(3)土壌消毒期間を確保できるため秋のイチゴ栽培に支障が出ない、(4)慣行のメロン栽培よりも減肥できる、(5)病虫害の発生が少ない点が挙げられます。今後、イチゴ圃場の利用効率が高まるとともに、メロン生産量の増加が期待されます。



写真7 イチゴ栽培ベッドを利用したメロン狩り実施圃場（館山市）

執筆及び編集、問い合わせ先

農林総合研究センター暖地園芸研究所

〒294-0014 館山市山本 1762

Tel : 0470-22-2603 (代)、Fax : 0470-22-2604

事務局

千葉県農林水産部担い手支援課

※「私的使用のための複製」や「引用」など、著作権法上認められた場合を除き、無断で複製・転用することはできません。